

植民地朝鮮における素人義太夫の活動⁽¹⁾

韓 京 子

1. はじめに

日本古典芸能である能・狂言・人形浄瑠璃・歌舞伎は、戦前、所謂「外地」において公演が行われていた。拙稿では、一九三〇～一九四〇年代の植民地朝鮮における人形浄瑠璃の公演について、また、一九一三年の市村羽左衛門の植民地台湾における歌舞伎公演について考察を行った。主に大正・昭和初期の公演を対象に考察を進めたが、全体像を把握するまでには至っていない。特に植民地となる以前から朝鮮（大韓帝国⁽³⁾）に滞在していた日本人社会における日本古典芸能の享受に関して注目してこなかった。本稿では、その一端として、新聞資料が残されている一九〇〇年代初頭から終戦まで、朝鮮に滞在していた日本人がどのような素人義太夫の活動を行っていたのか

確認してみたい。

2. 一九〇一年の竹本叶太夫の朝鮮訪問

一八七六年の朝日修好條規（江華島条約）により釜山、仁川、元山などが開港し、日本人居留地が設置され日本人の朝鮮移住が続いていた。それらの中には義太夫を愛好する人々が多数いた。

明治四十三（一九一〇）年九月刊行の『近松会雑誌』には、竹本叶太夫が一九〇一年に植民地朝鮮へ渡った際の興味深い記事（「朝鮮と義太夫」）が掲載されている。この記事では当時の植民地朝鮮における義太夫の人気、そして在朝日本人の義太夫同好会的な活動について確認することができる。

竹本叶太夫（一八七三～一九四三）は、明治一九（一八八六）

年に二代目鶴沢叶の門人となって叶吉と名乗り、明治二五（一八九二）年には二代目竹本越路太夫門下で初代竹本叶太夫と名を改め、昭和二（一九二七）年に退座した太夫である。その後、昭和一六（一九四一）年に復座して七代目春太夫を襲名している。この記事のなかで叶太夫は明治三十四（一九〇一）年八月に京城の御蟲眞の方に誘われ、「松葉屋の豊之助」と二人で朝鮮を訪れたとしている。「松葉屋の豊之助」は、三味線方の五代目豊沢広助（一八三一―一九〇四）と見られる。

また、叶太夫は、自分より先に朝鮮に渡り師匠として活躍していた人物に、豊竹八重太夫がいたと触れている。

義太夫は内地から澤山な人が韓国へ行と同時に、早うから流行致して居ますので、義太夫の師匠で一番先に往つた人は、豊竹八重太夫で、此人は実に朝鮮の大掾さんです。（但し古参を云ふ今猶韓国住居）夫から私の知人計りでも六七人の師匠が往つて居ます。

当時は義太夫が朝鮮で流行していて、日本からも多くの人が師匠として朝鮮に来ていたと記されている。朝鮮にもっとも早く渡つた豊竹八重太夫は、朝鮮では「大掾」と呼ばれていたとされる。「大掾」とは、もとは淨瑠璃太夫が受領して名乗る名誉称号を意味するもので、八重太夫が朝鮮で義太夫の師匠として非常に貴重な存在として待遇されていたことがわかる。この豊竹八重太夫について、豊竹小鞠太夫は、文楽研究家の鴻池幸武宛ての書簡の中で、以下のように触れている。

八重太夫／是モ八代目マデ継デヲリマス／橘太夫改八代目竹本八重太夫／此ノ人ハ早クカラ朝鮮ヘ稽古ニ／渡ツテ居マシタ／朝鮮ノ大掾サンノ様ニ申サレテイマシタ／余上手デハ有リマセン／

豊竹八重太夫は、朝鮮では重宝され義太夫の稽古を行い活躍しているが、実際のところ優れた太夫としては高く評価されていなかったようである。

義太夫の流行は首都の京城だけではなく地方都市においても同様であったことが、以下の記述からうかがえる。

・其頃仁川には、義太夫が大流行で、大阪より豊澤団三郎が師匠として往つて居りました。又女義太夫妻鶴といふ師匠もありまして、團三郎の方は杉の木会、妻鶴の方は矯風会、双方とも銀行、取引所杯（など）の立派な御連中計りでした。

・或日仁川大草旅館で双方合併で大会を催されました。（中略）京城の方では、光玉と云ふ女太夫が師匠で是も京城の紳士連中計り

仁川においても義太夫が大流行していたという話である。仁川は一八八三年に開港した港湾都市で、清や日本など各国の租界地が設置された外国人居住地域であった。日韓併合から四年後の大正三（一九一四）年には京城の日本人人口は五万九千人に達していたが、叶太夫が朝鮮を訪れた明治三十四（一九〇一）年の京城の日本人の人口は二四九〇名であり、仁川のそれは

四六二八名⁽⁸⁾で、この時期は京城より仁川の方が日本人が多かったのである。そのような状況であつたため仁川ですでに義太夫が流行っており、日本から三味線方、女義太夫の師匠もこの時期に朝鮮に渡り指導にあたっていたのである。当地の義太夫人気について叶太夫は、「最も其頃は先づ玉でも突くか、浄瑠璃の稽古でもせねば、外に遊びやうのない所でした。」と、当時の植民地朝鮮に娯楽が十分でなかったためと見ていた。

叶太夫はこの文のなかで同好会のメンバーを「立派な御連中計り」「紳士連中計り」としている。当時の義太夫同好会についてどのようなメンバーがいたのかは、『京城繁昌記』や『朝鮮新聞』から知ることができる。

まず、『京城繁昌記』には、次のような人物の名が挙げられている。

次に義太夫界に在つては高橋弁護士、一ノ瀬南大門駅長、巴城館若主人、山田幸七、安東静、大村百蔵など天狗連であるが皆登連なるものあり⁽⁹⁾

高橋弁護士とは高橋章之助のことで『宗家と朝鮮』の著者である。一ノ瀬武内南大門駅長のほかには、次のような人物の名が挙がつている。まず、巴城館若主人についてであるが、巴城館は京城の忠武路にあつた旅館で明成皇后弑害事件の謀議が行われた場所でもある。ここは松本卯一（一八五五⁽¹⁰⁾）が一八九五年から経営しており、「若主人」とは京城美術倶楽部監査で卯一の長男の民介を指すものと思われる。山田幸七は朝

鮮天然氷株式会社の設立者、安藤静は朝鮮総督府官房参次官として勤務し、一九一四年には京城通信社社長を務めていた人物である。大村百蔵は朝鮮鉄道協会幹事である。叶太夫の言うように「立派な御連中」が天狗連のメンバーだったことがわかる。

一方、大阪からの文楽招聘公演に関する『朝鮮新聞』の昭和二（一九二七）年八月二十七日付の記事には次のような人物が登場する。

文楽の一行近く京城に公演決定す 京城浄瑠璃界の志岐信太郎、後藤虎雄、大村百蔵、高橋章之助、土井伊右衛門、松本民介、樋口賢三郎等の諸氏が肝煎となり大阪文楽座の一行、竹本越名太夫、野澤吉房、野澤勝平氏らを招聘し、久方振りに人形浄瑠璃公開の計画進捗し越名太夫以下の一行は二十五日入京し⁽¹⁰⁾

『京城繁昌記』に登場する人物と重複する人物もいるが、そのほかの志岐信太郎は京城の朝鮮天然氷倉庫株式会社社長、後藤虎雄は京城製業取締役を務めており、土井伊右衛門は株式会社大二商會常務理事である。このような各界の名士が同好会（連）のメンバーとなっていたのである。

叶太夫の「朝鮮と義太夫」の記事から、一九〇〇年代の初頭にはすでに朝鮮において義太夫が流行していたこと、日本からも師匠として渡航していたこと、義太夫の同好者には地位の高く、名の知られた人が多かったことがわかる。それでは、在朝

日本人の義太夫同好会（素人義太夫の会）は、具体的にどのような活動をしていたのか確認していく。

3. 朝鮮における女義太夫・義太夫芸妓

早くから朝鮮に渡った太夫には女義太夫が多数いた。『京城繁昌記』には素人義太夫の会（連）がいくつも結成されていたことが記されており、番付に掲載された芸名にも女性の名が多数挙げられている。

番付の順次により芸名を記せば登雀、登初、登圓、瑠璃登、隆玉、多満登、鳴門、登、村登、山若、魚水、喜久登、紫扇、広司、千叟、澄登、とあつて三味線は、多根登、いね子、皆登といふ顔触れなり。又古参の師匠として奈良梅あり之れにも数十名の門人ありといふ。

古参の師匠として名が挙げられている奈良梅は、一九〇八年に京城に渡り義太夫を教えていた。^①『東都芸苑女義太夫名花評判記』によると、「容貌皎として（中略）斯姿あり斯芸あり。其真打の位置を占むること蓋しまた難きにあらざるべし^②」と、容姿も芸も優れた女義太夫であったと見られる。『女義太夫芸評』でも「同文は上受けといふ程にはあらねども。さりとして簾の降ると共に、拍手の音一つもなき程にはあらず。音声は固き方にて。ふしの力ある調なれば。（中略）熱心に心懸けなば此先き望み多かるべし^③」と、高くも悪くもないという評であった。

しかし朝鮮においては、「鮮内一人者として名ある^④」、「半島

浄瑠璃界の耆宿である竹本奈良梅師匠は京城二十五年斯界の為に尽し梅鶯界の名は内地にも鳴り響いてゐる^⑤」と、朝鮮の浄瑠璃界においては長期間にわたり師匠として活躍した第一人者として重宝されており、古稀には、大々的に記念祝賀浄瑠璃大会が催されたりもする程の人物であった。

この奈良梅のもとには、日本から野澤勝平が訪れ稽古をしたことがあった^⑥。野澤勝平は、二代目野沢喜左衛門のことで、大正から昭和時代に活躍した浄瑠璃三味線方である^⑦。野澤勝平は大阪文楽座の休場を利用して渡航し、病気の治療のかたわら奈良梅のもとで三味線を指導していた。朝鮮からの招聘によるものは、記事からは明らかではないが、文楽座の重鎮といわれる人物が、朝鮮で指導をしたり、公演を行ったりしていたのである。その後も、野澤勝平は新義座を結成してから、京城へ公演に訪れていた。

大正期から昭和にかけての女義太夫界の第一人者として知られる竹本素女（一八八五—一九六六）も朝鮮に渡っていた一人であった。『素女物語』には素女が招聘され朝鮮で公演したことにについて以下のように記されている。

大正一四年には、朝鮮素義界の招きで、新弟子の素八、素治を連れて朝鮮の旅にでた。（中略）総督だった斎藤実大將から呼ばれたり、京城劇場で華やかに五日間も打って、「朝鮮なんか、内地と変わらない」などと思ひながら^⑧

当時朝鮮で発行された新聞には素女の上記の公演についての

記事は見当たらず、翌年大正十五（一九二六）年に「京城有志の懇望¹⁹」により京城劇場で三日間公演を行ったことが新聞記事となっている。『朝鮮新聞』大正十五年七月十七日付の記事には、写真付きで素女が紹介されている。

義太夫界の巨星竹本素女来る愈々十八日から京劇に開演する浄瑠璃会の呂昇と並称される竹本素女太夫は（中略）内地の浄瑠璃界では異数として杉山茂丸氏を初め官民有力者から其至芸を憧憬されてゐる今回も近江銀行頭取下郷伝兵衛氏が今回渡鮮に際し特に肝煎となつて竹本素女一行も渡鮮過般入京し総督官邸に於ては齊藤総督同夫人湯浅政務総監婦人其他を感動せしめた

呂昇（一八七四—一九三〇）が大阪の女義太夫として有名なのに対し、素女は東京の女義太夫の中心的人物であった。呂昇は大正十四（一九二五）年に引退しており、素女は「呂昇引退の今日は女義太夫界の第一人者として人氣を背負つて居る。」とされていた。京城では「久方振りの女義一行ではあり然も斯界の花形²⁰」である素女の至芸を聞けるとあって、花柳界をはじめ前人氣が非常に高かったという。

記事にもあるように、素女は杉山茂丸²¹が懇意にしていたことで知られる。素女は朝鮮素義会の招聘で公演を行い、総督の斎藤実にも呼ばれ官邸を訪れていた。この朝鮮訪問の仲介をしたのが近江銀行頭取の下郷伝兵衛で、また日本からの同伴者には貿易商の福島行信がいたことが記されていることから、素女は

当時の有力者と親交があつて朝鮮においても優遇されていたことがわかる。

朝鮮における女義太夫には、多数の女将や芸妓がいた。京城には「常盤会」という素人女義太夫会が組織され、初めての公演が昭和二（一九二七）年に開催されていた。この「常盤会」は、「千歳、花仙、大黒、喜代仲、清進楼などが世話役で京城府内女流の太棹連を網羅」した「京城一流料亭の女将たちを中心」とした婦人連で、夏がれ時に景気をつけようと、素人義太夫の会を開催することもあった。²²

義太夫を嗜む京城の芸妓たちは、「やよい会」という会を組織していた。この会は、京城の本券、新券両券の芸妓十名が竹本祖太夫師を会長として昭和七（一九三二）年三月に組織したもので、定期的に大会も催していた。彼女たちは「芸妓義太夫」または「義太芸妓²³」とも呼ばれていた。この芸妓たちが朝鮮における素人義太夫界において多数を占めていた。

芸妓の義太夫大会は、京城だけでなく、仁川や釜山、馬山、鎮海、春川などの地方都市でも開催されており、当時の新聞に関連記事が多数掲載されている。その中でも興味深いのは、『朝鮮新聞』昭和四（一九二九）年七月十七日付の「京城龍盛会的美妓娘子軍仁川に遠征浄瑠璃大会」という記事である。「三味は京城唯一と誇る²⁴」とされていた三味線の師匠豊澤龍糸は龍盛会という芸妓義太夫会を率いており、斯界では有名だった。この大会は、朝鮮新聞社仁川支社仁川俱樂部会、仁川芸妓券番等

の同好者などの後援によって、京城から仁川に遠征して開催されたものであった。出演する芸妓の中には十一才の土井絹枝が「三勝半七酒屋の段」を語ることになっていたことも記されており、噂の義太夫芸妓たちを見ようと非常に注目を浴びた催し物だったようである。

植民地朝鮮に滞在していた芸妓は、さまざまな芸を身につけていたが、義太夫についてはやよい会を組織したり、ラジオにも出演したりするなど、力を入れていた芸能分野のようである。また芸妓を引退する際には「隠退披露の素人義太夫大会」が催されることもあった。⁽³¹⁾

このように流行っていた義太夫が、大正の頃はその人氣が衰え、日本へ帰国する師匠が出てきた。『朝鮮時報』大正六(一九一七)年八月二三日の記事には、女義太夫の越之助の帰国について記されている。

釜山素義界の一權威を失ふ越之助の引揚げ 竹本広八帰阪後独り当地に踏み止りて浄瑠璃と三昧を教へつつ一時は多数の弟子も有りて(中略)近來稽古に通ふもの余り多からず斯くては当地に居るも詮なき事と決心せしとかにて近日大阪に引き上る由なるが(中略)兎に角百名近き義太夫を有する釜山としては寔に遺憾なり

長年釜山の素人義太夫界において師匠を努めてきた女義太夫の竹本広八と竹本越之助が立て続けに帰国した。稽古をする者が少なくなつたことが理由とされている。越之助は釜山素義会

長も努めており、「日本女三太夫の一人」⁽³²⁾「大阪浄瑠璃会の大看板」⁽³³⁾と高い評価があった人物である。越之助と広八は、「釜山に於ける素人浄瑠璃界は越之助、広八の両女師匠を東西の大関として見ねばならぬ」と言われるほどであったが、お互いは反目し合う仲でもあったと言われる。広八は研鑽を理由に大正五(一九一六)年十月に帰阪していた。⁽³⁴⁾一方の越之助は、帰阪してから、大正十四(一九二五)年に一時期釜山に戻り稽古を再開していた。その後、昭和三(一九二八)年一月に再び釜山に戻るが、昭和十二(一九三七)年に、十四年間釜山素義界の指導に尽力して釜山を離れた。⁽³⁵⁾

『釜山日報』大正四(一九一五)年二月二日の記事には、東亜煙草会社釜山販売所主催で実施された釜山素人浄瑠璃及び券番芸妓の人氣投票の得点結果表が掲載されている。この人氣投票で注目されるのは、素人義太夫と芸妓の二つに対してのものであったという点である。このような人氣投票は、釜山日報でも行われていた。十周年を記念し、南鮮五道を対象に素人百傑人氣百美人を選定した。素人義太夫の方は、高得点者より百人を選び「素義百傑」として番付を作成して新聞紙上に掲載し、十等までの当選者に浄瑠璃会に出演する資格が与えられたようである。⁽³⁶⁾投票については締切までの一ヶ月半の間、中間発表だけでなく、中間の得点の様子が「人氣投票界戦況」「素義戦は尚ほ偵察戦」「果たして梅歌軍捲土重来」など、あたかも戦況中継のように連日伝えられる報道ぶりであった。この人氣投票

は二ヶ月に渡り巷を賑わせた一大イベントであったようで、朝鮮の日本人社会における素人義太夫の人気のほどがうかがえて興味深い。

4. 朝鮮における義太夫同好者の活動

①素人義太夫の同好会・素義連合協会を組織

朝鮮における素人義太夫同好会には、上記で触れた天狗連、皆登連、常盤連、やよい会など多数の会があった。釜山においても、釜山女義太夫連のほか、「文楽会」⁽⁴³⁾が、鎮海では「鎮海天狗俱樂部」⁽⁴⁴⁾などが組織されるなど、各地方に複数の会（連）が存在していた。

昭和五（一九三〇）年には、これらの各同好会が地域ごとにまとまった連合会が組織されるようになる。「京城日報」には、京城における素人義太夫の連合会が組織されたことが「斯界の一革命」として記されている。京城素義連合会は、「年々衰頹の傾向にある斯藝の振興と向上を主眼とし、従来これの発展を阻害しつつある幾多因習的情弊を除去して同好者相互の親睦を図る」ことを目的に発会された。年一回大会を開き、大阪から招いた「權威ある批評家」による採点をもとに順位を定め、会員各自の発奮を促す計画であった。娯楽の同好会として連合会なるものが作られたのは異例のことで、「単なる素義の娯楽的演技に斯る組織的の集団が出来たことは殆ど未曾有のことであり稀に見る大規模な計画」とされていた。

②温習会・月並会・素義大会の開催

在朝日本人の義太夫同好者は、会を組織して日本から師匠を招聘し稽古をするだけでなく、稽古で修業した結果を披露する温習会や月並会⁽⁴⁵⁾、また、定期的に、地域毎あるいは京城以外の地方都市の素義会とともに連合の大会を開催するなど多様な活動を繰り広げていた。

温習会は規模によって、個人宅あるいは会館・劇場で行われていたようである。温習会は新聞紙面に開催案内だけでなく、感想評も掲載されていた。大正四（一九一五）年に鎮海天保座で行われた寿連の義太夫温習会については、「妹背山四段竹に雀アンナ恨の声を出しては棧敷に居た細君が御可哀さうだとは口の悪い連中の悪口玉藻前三段目道春館の段（中略）只浚藻船の汽笛の様な声丈け出ねばとは御鼠眞の陰口」などと、露骨に厳しい評が掲載されることもあった。

地域別の浄瑠璃大会としては、大正五（一九一六）年七月十一日より五日間、釜山弁天座で釜山素義連合会が開かれていた。これは同月六日に発会した「文楽会」に刺激され連合大会の開催が決まったものであった。「文楽会」は、釜山商業会議所評議員に釜山素義界の八名が当選したことから懇親を兼ねた会を設け、大阪文楽座に因んで命名したものであった。釜山素義連合会各部屋からの出演者も非常に多く、納涼がてらの聴者も多いことが予想され、近年稀なる盛況を呈すだろうと期待されていた⁽⁴⁶⁾。

朝鮮全地域の素人義太夫大会については、『京城日報』大正十四（一九二五）年三月十九日付の記事からうかがえる。京城の奈良梅、彌国、広司、清鳳の各会を中心として半島趣味大観社が主催した大会が京城で四月三日から四日間にわたって開催され、五十名程度が参加したようである。

このような大会では、審査を行った結果や評を新聞に掲載したり、番付も公表していた。昭和六（一九三一）年六月、京城素義連合会は大阪から審査員として「斯界の権威」である南方松若氏を招き、浪花館で「第一回全鮮素義審査探点大会」を三日間開催し、その結果を『朝鮮新聞』六月九日付の紙面に掲載していた。⁵⁴その後「全鮮素義審査大会」は毎年六月および七月に定期的に開催された。

前述の大正十四年の大会のように全鮮素義大会は雑誌出版社が主催となることもあった。この大会は、京都で刊行されていた浄瑠璃雑誌『浄瑠璃世界』の出版社である、浄瑠璃世界社釜山支局が主催、そして釜山日報社が後援となつて企画された。⁵⁵企画の主旨は、現在浄瑠璃は素人の全盛期であり、「益々普及を計りたく、且つ又思想の悪化しつゝ、ある今日、我国特有の仁義忠孝の道を鼓吹」し、「斯道の発展、技術の向上、同好者間の親睦」を目的とするものであった。この大会は釜山在住の素義界の面々が有志と協議し「内地」と「在満同好者の応援」を得て企画したものであった。ただ『浄瑠璃世界』二七〇号（大正十四年十二月）には、「全鮮素義競技大会」が翌年の三月一

日から開催予定で目下交渉中であるとの「特別広告」が掲載されているだけで、実施されたのかについては不詳である。開催予定期間中の『釜山日報』には三月十九日から開催された「第一回内鮮連合素人浄瑠璃大会」に関する広告や関連記事のみ連日掲載されている。⁵⁶この大会は主催が釜山日報社、後援が浄瑠璃世界社となつていことから、当初「全鮮素義競技大会」であったものが、「内地」にまで地域を広げた「内鮮連合素人浄瑠璃大会」と変更されたものと見られる。

『浄瑠璃世界』に掲載された広告には、「釜山太平館」において「三月十七日より五日間」とあるが、『釜山日報』によると、実際は釜山で幕開けし、大邱、大田、群山、京城と五つの都市を移動して行われた巡回大会であつたようである。また各地素義会（連）の重鎮の参加や大会に備えた練習ぶりが伝えられ、「義太界未曾有の顔ぞろへ」と、大会の盛況を予想する記事も連日掲載されていた。釜山だけでも、一日に九名ずつ計四十五名が参加しており「半島素義会空前の催し」とされた大規模な企画であり、二階の客席まで連日満席となるほど大盛況であつた。⁵⁷

このような朝鮮における素人義太夫大会は、「内地」だけでなく、「満洲」まで地域を広げて催されていた。『釜山日報』昭和十一（一九三六）年九月十一日の記事には「鮮満素人義太夫の審査 義太夫界の権威竹本角太夫、麻生五福の両師は釜山を皮切に鮮満素義審査のため一兩日中に来鮮する」とある。この大会については、雑誌『文楽』にその詳細が掲載されている。

雑誌『文楽』には、「内地」だけでなく「外地」における素人義太夫の動向についても記事が掲載されていた。拙稿⁽⁵⁶⁾でも言及したが、この昭和十一年の素義大会については「秋の大会案内」として「●満鮮素義大会 九月十二日より廿五日迄釜山、京城、撫順、大連に於て開催 審査竹本角太夫、麻生五福氏⁽⁵⁷⁾」と掲載され、大会審査の結果は番付として雑誌に付されている。満鮮素義大会は毎年開催された模様で、各地から一つの都市に集合して行われたものではなく、「内鮮連合素人浄瑠璃大会」同様、各都市を巡ってそれぞれ審査大会が行われていたようである。

③「内地」からの招聘公演誘致

京城素義師匠連、京城素義連合会などの後援により、昭和七（一九三二）年に竹本角太夫の公演が開催されたり、京城素義連合協会十周年記念として、大阪文楽乙女人形浄瑠璃大会が開催されたりするなど、朝鮮の素義会からの招聘により義太夫・文楽の公演が行われることもあった⁽⁵⁸⁾。

会としてではなく、朝鮮在住の有力者個人が大阪から文楽座を招聘したこともあった。『朝鮮新聞』昭和六（一九三一）年十一月二十五日付記事には、二十八日から四日間、京城演芸館にて「大阪文楽座の人形浄瑠璃が十三年振り」に公演される⁽⁵⁹⁾ことが記されているが、この公演は石炭・鉱物貿易商の三国商会店主の土井誠一氏⁽⁶⁰⁾が創立二十周年記念謝恩奉仕として企画したものであった。文楽座の文字太夫や源路太夫などが出演したこ

の公演は、入場できない観客が多数出たほど非常に盛況であったという。新聞記事にも「到底斯かる大物と呼ぶ事の出来ぬ事情にあつたのを土井氏の力⁽⁶¹⁾」で上演に至ったと、公演開催に向けた三国商会店主土井氏の取り組みを高く評価していた。

朝鮮における義太夫同好者は招聘公演を企画するだけではなく、玄人とともに舞台上に上がり共演することもあった。『朝鮮新聞』大正十三（一九二四）年十一月十八日の記事には、「大人気の人形浄瑠璃」と題し、京城劇場において開催される「上村六之丞一座」の公演について次のような記事が掲載されている。

竹本奈良梅の源藏出立は十八番ものとして立派な出来 人形も源藏源左衛門お次と呼吸が合つて立派 豊竹三駒太夫の秀衡佐藤館の段も良い豊竹新呂昇の玉藻前三段目は流石に聴衆を魅了してゐた上に舞台は上村六之丞の鮮やかな人形 愁嘆場にスツカリ観衆を泣かせてゐた

先にも言及したように、奈良梅は京城において義太夫の師匠として長い期間活躍していた人物であり、この公演では彼女の得意な「赤垣源藏出立の段」を語り好評だったようである。大阪から訪れた豊竹三駒太夫と豊竹新呂昇、朝鮮の素義界から奈良梅のほか、竹本祖太夫が「お染久松野崎村の段」を、竹本梅若が「菅原伝授手習鑑の寺子屋の段」を語り、観客の呼物になったという。上村六之丞は、「伊予源之丞」という淡路から愛媛三津浜地区に伝わった人形芝居の人形遣いであった。

人形遣いは「乙女人形」という女性人形遣いの吉田光子一座が朝鮮に公演に訪れていた（昭和十一年五月・十一月）。大阪文楽座から太夫や三味線は招待しても、文楽座の人形遣いまで揃った形の文楽公演は非常に稀だったのである。そのためか、「幻燈」が用いられることもあった。明治三十八（一九〇五）年刊行された釜山を紹介する本である『釜山港勢一斑』⁽⁶⁴⁾には、以下のような釜山の娯楽についての記述が見られる。

劇場ハ二ヶ所アリテ周年諸興行絶タズ近時ハ居留地外ニモ
仮劇場ヲ作りテ観覧ニ供スルニ至ル然リト雖モ多クハ下層
社会ノ娯楽ニシテ一般ノ観覧ニ供スルニ足ラズ／浄瑠璃、
謡曲等モ一部社会ニ流行ス／左ニ三拾七年ニ於ケル諸興行
表ヲ掲ケン／諸興行（中略）源氏節演劇 五 祭文浄瑠璃

四九 浄瑠璃幻燈 一五

明治三十七（一九〇四）年に行われていたさまざまな興行のなかで注目されるのは「浄瑠璃幻燈」が十五回行われたことである。浄瑠璃幻燈は、浄瑠璃の語りに合わせて幻燈機を使って物語をスクリーンに映し出す形の上演のことである。人形浄瑠璃としての上演がかなわない状況下で、幻燈を用いた公演が行われていたことがわかる興味深い記述である。

④ラジオ放送への出演

京城中央放送局は昭和二（一九二七）年二月十六日に本放送が開始され、初期は昼間と夕方六時以降に演芸・音楽のプログ

ラムが編成されていた。本放送二日目には「連合浄瑠璃」と題して、『仮名手本忠臣蔵』七段目が放送された。太夫には、志岐紫扇、後藤楓江、樋口吉彌、野澤吉之助が、はやしには新吉豊芸妓連、三味線に竹本奈良梅など、京城の素義界で活躍している面々が出演していた。

同年十二月二十二日夕方には、太夫高田二光、三味線鶴澤清風による義太夫『一谷嫩軍記』の須磨の浦の段が放送されていた。これは、素人義太夫の高田二光氏が京城中央放送局の依頼を受けて行われたものであった。また、昭和十年に開局した釜山放送局では、慶北道会副議長の中谷三郎氏が得意の義太夫を放送する予定であったことなども『釜山日報』の記事から知ることができる。日本からの中継や玄人の義太夫の出演もあるが、その他の場合は当地の素人義太夫がラジオ放送に出演していたのである。

⑤素人義太夫大会開催の意図

素人義太夫大会は、納涼、忘年、歓迎、古稀、追善、送別、お披露目、お名残、近松二百年記念など様々な理由で大会が企画された。一方、同好者同士の内輪向けの催しばかりではなく、昭和十四（一九三九）年九月には、全州俱樂部が「市民慰安」を目的に浄瑠璃大会を催すということもあった。⁽⁶⁵⁾

先述の三国商会主催の公演では、上演に際し「第一、第二、女子実業、女子技芸等の各女学生約二千名に対し初日二日目の

両日昼間総見」と、女学生の総見を企画していた。初日二日目の演目は「寺子屋」と『壺坂靈驗記』で、「前者によって忠義者で貞節を鼓吹する」としており、各学校には予め出し物について担任教師が解説することとなっていたという。義太夫を女学生への教育へ用いるという意見は、雑誌『文楽』の主幹、吉哉が昭和十三（一九三八）年発行の『文楽』第十八号において主張していたことだった。昭和十年に発会した大日本浄曲協会も、女学校を対象に人形浄瑠璃を無償で公演し、情操教育に資することを目的としていたとされる。昭和十年頃、内地では頻りに義太夫（人形浄瑠璃）の女学生情操教育への有用性が語られていたが、それよりも早く朝鮮において試みられていたのである。

その他の目的としては、「戦捷祝賀」^②、「日本精神」の昂揚や「芸術報国」を掲げた会もあった。『朝鮮新聞』（中部版）の昭和十一（一九三六）年十月九日の記事には、「仁川素義会では（中略）月並会を開き感銘興味裡に忠孝仁義の道を研究し趣味の方面からも日本精神の強化をはからうと言ふので岩崎一声氏の外多数の有志が出演する事になつた」とある。豊澤仙左師匠の指導で仁川素義会の月並会が行われたが、それまでの会の雰囲気とは打って変わって、この時期には趣味の分野においても日本精神の強化を図ろうという、時局を反映したものになっていたのである。

また、『朝鮮新聞』の昭和十六（一九四一）年九月九日の記

事には、次のように第一回翼賛素義審査大会が催されたことが掲載されている。

朝鮮音楽協会では健全なる音楽研磨による日本精神の昂揚と芸術報国のため十九日より三日間府内旭町一丁目旭講堂において第一回翼賛素義審査大会を開催することになったが、初日には団体儀礼による開会式、最終日には成績優秀演者の表彰式を挙行、総督章典初め賞状、賞品の授与を行ひ意義あらしめることになった。

仁川素義会の月並会と同じく、目的に日本精神の昂揚、芸術報国が掲げられている。それまでの素人浄瑠璃大会とは異なり、昭和十六年に新体制文化の発展向上に貢献することを目的として結成された「朝鮮音楽協会」^③が主催となったものであった。優秀者には「総督賞典」が授与されることとなっており、官が関与することで単なる素人の娯楽という意味合い以上の性格を持つ会となっていた。

昭和十一（一九三六）年八月に開催された京城素義会を聞いた西洋画家の八木彩霞の感想が『朝鮮及満州』（一九三六年九月）に載せられている。^④そこには、「朝鮮素義会としては大成功であって、幹部の方々は近く常設館を建設しこの国粋芸術の発展を計ると共に思想先導のたらしめんと意気込んで居られることは邦家の為め慶賀に堪へない」と書かれており、素人の同好者による浄瑠璃大会が昭和十年頃から、次第と国策に沿う動きを見せる様子うかがえるのである。

5. おわりに

以上のように、明治末期から昭和初期にいたる間、朝鮮に在住する日本人には義太夫の同好者が多数いて、組織的に娯楽・余暇活動をしていたことがわかった。首都の京城だけではなく、釜山、仁川、馬山、春川など地方の都市で、京城同様の活動が行われており、さらには「内地」や「満洲」の素義会とともに地域を拡大した大会などを企画し実施していた。芸の向上、親睦を目的としていた素人義太夫会は、昭和十年頃になると、戦捷を祝賀したり、日本精神の昂揚や、思想先導の手段としての意味を持つようになる変化も見られた。戦時下において国策に沿うべく「芸術報国」運動に同調した活動をするようになっていたのである。

娯楽が多様化されていなかった時期、植民地朝鮮に滞在する日本人の間でいかに義太夫が享受されていたか、その一面を確認することができた。しかし、長期間続いた素人義太夫の活動を朝鮮の人々はどうのように見ていたのか、また関わっていたのかについては明らかにできなかった。今後の課題としたい。

注

- (1) 本研究はJST科研費[19K23082]の助成を受けたものです。
 (2) 「植民地朝鮮における文楽興行」「日本学研究」第46輯、檀国大学校日本研究所、二〇一五年九月「植民地台湾における日本伝統

芸能の公演」「日語日文学研究」101(2)、韓国日語日文学会、二〇一七年五月

(3) 一八九七年に朝鮮は国号を「大韓帝国」と改める。

(4) 日外アソシエーツ『新撰 芸能人物事典 明治～平成』、二〇一〇年、橘米吉(竹本叶太夫)『此君帖』第二巻、富久積会、一九三三年

(5) 「朝鮮と義太夫」『近松会雑誌』、明治四十三年九月

(6) 書簡番号21 昭和十五年二十八日付け 差出人 豊竹小鞠太夫宛名 鴻池幸武、小島智章・児玉竜一・原田真澄(二〇一一)「鴻池幸武宛て豊竹古鞆太夫書簡二十三通」『演劇研究』35

(7) 岡良助『京城繁昌記』博文社、一九二五年

(8) 仁川商工會議所『統計年表』昭和九年版、一九三五年

(9) 岡良助前掲書。

(10) 「朝鮮新聞」昭和二年八月二十七日

(11) 「京城日報」明治四十五年二月十一日・十三日・十七日

(12) 永井政一『東都芸苑女義太夫名花評判記』、翠紅樓、一八九一年

(13) 旭峯居士・傘の台主人、『女義太夫芸評』博盛堂、一八九一年

(14) 「朝鮮時報」大正十二年四月十三日

(15) 「朝鮮新聞」昭和七年五月十五日

(16) 「朝鮮新聞」昭和三年八月十一日

(17) 上田正昭ほか監修『日本人名大辞典』講談社、二〇〇一年

(18) 守美雄、『素女物語』、蒼林社、一九五四年

- (19) 『京城日報』 大正十五年七月十七日
- (20) 『京城日報』 大正十五年七月十七日
- (21) 『朝鮮新聞』 大正十五年七月十七日
- (22) 政治家・南滿洲鐵道株式会社創設や日韓併合の裏面で暗躍。夢野久作の父で『浄瑠璃素人講釈』著者。
- (23) 『朝鮮新聞』 大正十五年七月十八日
- (24) 『京城日報』 昭和二年八月二十七日
- (25) 『京城日報』 昭和三年六月二十三日
- (26) 『京城日報』 昭和七年三月二十六日
- (27) 『朝鮮新聞』 (昭和八年二月二十日) には、「やよい会」について「京城芸妓の義太夫研究団体やよひ会の第三回演奏会は古典芸術な義太夫に対して極めて真面目に精進しつゝ、ある人々」として
- (28) 『朝鮮新聞』 昭和三年七月八日「新町券番では今回更に杉山キクといふ義太芸妓が現はれたキクは清津元山で義太夫の師匠をしてゐたもので新町券へな猿枝と称して現はれる筈で七日本町営業署に営業許可願ひを提出して来た」とあり、義太夫の師匠であつた者が芸妓になることもあつた。
- (29) 『朝鮮新聞』 昭和四年七月十七日
- (30) 『朝鮮新聞』 昭和七年十一月六日ラヂオ 義太夫 碁太平記白石 浄瑠璃 本券 花菊 同 太助 三味線 同 文龍花菊、太助、文龍さんの三人共本券名うての大芸者者何れも久し振りの放送です。

- (31) 『朝鮮新聞』 昭和七年十一月六日
- (31) 『釜山日報』 昭和十二年三月五日の記事には、浄瑠璃緑会主の福田安次郎の思い出話として「私が渡鮮したのは明治三十一年で(中略)三十四、五年頃が素義の全盛時代であつたと思ひます」と語ったことが掲載されている。
- (32) 『京城日報』 大正十五年二月三日
- (33) 『釜山日報』 大正十四年七月三十日
- (34) 『釜山日報』 大正五年二月三日
- (35) 『釜山日報』 大正五年九月三日
- (36) 『釜山日報』 大正五年九月六日、『釜山日報』 大正七年一月九日
- (37) 『釜山日報』 大正十四年七月三十日
- (38) 『釜山日報』 昭和三年一月十八日
- (39) 『釜山日報』 昭和十二年三月十七日
- (40) 慶尚北道・慶尚南道・全羅北道・全羅南道・忠清南道内に在住する者が応募の資格であつた。『釜山日報』 大正六年四月三日
- (41) 『釜山日報』 大正六年四月七日
- (42) 『釜山日報』 大正五年十月二十三日
- (43) 『釜山日報』 大正四年一月二十一日
- (44) 『朝鮮新聞』 昭和五年八月九日
- (45) 『釜山日報』 大正七年十二月十一日「素義月並会 千代太夫連のおさらへ」、『朝鮮時報』 大正六年九月二十二日(地方版)大邱「素義月並会開催」など。
- (46) 『京城日報』 大正十五年六月十八日、『釜山日報』 大正十五年六

月十八日

(47) 『釜山日報』(釜山日報付録「馬鎮日刊」) 大正四年十一月二十六日

(48) 『釜山日報』大正五年七月五日、『朝鮮時報』大正五年七月六日

(49) 『釜山日報』大正五年七月十日

(50) 『朝鮮新聞』昭和六年六月五日、九日

(51) 『淨瑠璃世界』二七〇号、大正十四年十二月

(52) 『淨瑠璃世界』二七二号(大正十五年十二月)には、「三月十七日より五日間」「後援淨瑠璃世界社」とあるが、『釜山日報』大正十五年三月十二日の広告には、「十八日より廿二日まで」「後援内鮮連合淨瑠璃会」と変更されている。また、實際大会は一日延期され十九日に開始された。

(53) 『釜山日報』大正十五年三月十六日

(54) 『釜山日報』大正十五年三月十八日

(55) 『釜山日報』大正十五年三月二十一日、三月二十四日

(56) 『日本学研究』46輯、檀国大学校日本研究所、二〇一五年九月

(57) 『文楽』第一巻第二号、文楽社、一九三六年九月

(58) 韓京子「植民地朝鮮における文楽興行」『日本学研究』第46輯、檀国大学校日本研究所、二〇一五年九月、『朝鮮新聞』昭和七年九月二十三日、『朝鮮新聞』昭和十五年十月二十三日

(59) 文楽座の太夫、三味線が訪れたが、人形遣いは乙女人形(乙女文楽)が同行したものと見られる。

(60) 『京城繁昌記』に南満洲鉄道会社撫順炭特約販売所とある。中

村資良『朝鮮銀行會社組合要録』(東亞經濟時報社、一九三五年)によると、代表が土井誠一で石炭及び諸鉱物の販売、不動産に関する一切の事業を経営する会社とある。

(61) 『朝鮮新聞』昭和六年十一月三十日

(62) 『朝鮮新聞』昭和六年十一月二十五日

(63) 『朝鮮新聞』大正十三年十一月十六日

(64) 相澤仁助編纂、一九〇五年

(65) 早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『幻燈スライドの博物誌 プロジェクション・メディアの考古学』青弓社、二〇一五年、

(66) 徐在吉「ODN京城放送局の設立と初期の芸能放送」『ソウル学研究』二十七号、二〇〇六年八月(韓国語)、『京城日報』昭和二年二月十六日

(67) 『京城日報』昭和二年十二月二十二日、二十三日「義太夫界で定評のある豊国生命の高田氏は廿二日夕DK局の依頼を受けて得意の義太夫を放送する事となった」

(68) 『釜山日報』昭和十二年三月六日「中谷氏の素義放送」

(69) 『朝鮮新聞』昭和十四年九月九日

(70) 「国民精神読本として義太夫正本を推奨す」と題した社説の中で「文部当局者は一歩進めて此義太夫正本を全国の青少年少女教育の精神修養教材に応用する勇気があつてほしいのである。」と主張。

(71) 多田英俊「思想教育の芸術鑑賞に及ぼす影響について―戦前の女学校向け人形淨瑠璃公演を中心に―」『演劇学論叢』十五、

二〇一六年三月

(72) 拙稿「植民地朝鮮における文楽興行」『日本学研究』第46輯、檀国大学校日本研究所、二〇一五年九月）で言及したが、昭和十三年十一月に、日本軍が武漢三鎮を陥落したことを祝賀する浄瑠璃大会が開催された。『文楽』第二十三号、一九三一年一月

(73) 昭和十六年一月二十五日に結成式。音楽の健全な発達と音楽家の質的向上、新体制文化の発展向上に貢献することを目的として結成され、音楽報国に邁進。『毎日新報』昭和十六年一月二十一日、二十六日、昭和十七年一月二十六日。

(74) 八木彩霞「朝鮮に義太夫を聴きて」『朝鮮及満州』三百四十六号、朝鮮及満州社、一九三六年九月

(はん・ぎょんじゃ／本学教授)